The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多文化・多言語の背景をもつ生徒たちの人間形成-学習面と心理面を支える教育支援の在り方を探る-
Author(s)	潘, 寧
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70679
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　潘　　寧　　）	
論文題名	多文化・多言語の背景をもつ生徒たちの人間形成 ―学習面と心理面を支える教育支援の在り方を探る―

論文内容の要旨

本博士論文の研究目的は、多文化・多言語の背景をもつ生徒たちの人間形成を重視し、学習面と心理面を支える教育支援の在り方を探ることである。なお、本研究では、「人間形成」という言葉を「個人としての成長やグローバル社会の一員として社会やコミュニティの責任を果たす力（C.ファデル・M.ビアリックとB.トリリング，2015:113）」をもつ人間になることだと定義する。

本博士論文は、三部構成になっている。第1部の第1章から第3章は、「研究背景、理論的枠組み、方法論の紹介」、第2部の第4章から第6章は、「実践および考察の結果」、第3部の第7章は、「結論および今後の課題」をそれぞれ扱っている。以下に各章の概要を記す。

第1部第1章では、多文化・多言語の背景をもつ生徒（Culturally Linguistically Diverse Children，以下「CLD生」）の人間形成に関する現状について整理を行い、そこから読み取れる課題の所在を明らかにした。まず、CLD生に対する教育施策の歴史的変遷およびその方向性について述べた。次に、学校現場の状況からCLD生に対する学習面・心理面における支援を概観した。最後に、教育支援における課題を提示し、本論の目的となる「CLD生たちの人間形成につながる学習面・心理面の支援」の在り方について検討した。

第1部第2章では、母語を支援に活用する可能性を探った先行研究について整理を行った。バイリンガル教育の視点から、支援に母語を活用した理論として、Cummins（1984:140-145）の「2言語相互依存仮説」が挙げられる。カミンズは、母語と第二言語には、深層で共通する言語能力の領域が存在し、その共通する言語能力をどちらか一方の言語によって高めることができれば、その分、もう一方の言語能力にも転移させることが可能であると述べている。このカミンズの一連の理論を基礎に、「教科・母語・日本語相互学習モデル（岡崎 1997）」が考案された。しかし、母語と日本語による先行学習をそれぞれ対象となる生徒の教育課程に組み込む場合には、実施する時間、人材の確保が課題となる。また、竹山・葛西（2008）と田中（2004）は、CLD生に対する長期的な心のケアの必要性を主張している。

第1部第3章では、本研究の主な研究手法であるアクションリサーチ（以下、AR）とライフストーリー(以下、LS)について述べた。ARとは、1940年代のアメリカ社会心理学者レヴィン（Kurt Lewin）により、開発された研究方法であり、個人の実践の改善と社会の変革を促す研究方法として実施されてきた。LSに関しては、桜井（2012:6）が「個人のライフについての口述の物語」と定義している。本論文では、教育現場における実践活動の効果を向上させ、CLD生に対する教育の在り方について、新たな視点から考えることを促すために、実践のARとCLD生のLSを通して考察を行った。なお、本研究の進行にあたり、筆者自身が教育現場での観察のみならず、支援者としてもCLD生の支援に携わってきたことも付記したい。

第2部第4章では、母語による学習コンテンツを利用することにより、CLD生の過去の「スキーマ（既存の知識・体験）」を積極的に活性化させ、「母語・日本語・教科の相互育成学習」および「母語による学習言語能力」の伸長を目指した実践を試みた。また、逸脱行動を繰り返すCLD生に対する支援を行う中で、母語による学習コンテンツを利用し、感情のコントロールとメンタルヘルスについて、注意を促す試みを行った。実践の省察および追跡調査を通して、母語による学習面と心理面の支援において、肯定的な効果が確認できた。

第2部第5章では、CLD生のLSを構成し、言語やエスニックルーツなどの家族から受け継がれた「垂直的アイデンティティ」以外にも、セクシャル・マイノリティや「不良」などといった家族とは必ずしも同じとは言えない「水平的アイデンティティ」の発達も、CLD生の人間形成にとって重要であると論じた。また、CLD生のLSを通して、「水平的アイデンティティ」の存在は、CLD生が所在している家族・コミュニティ・学校システムにより、排除、または、無視される可能性があることがわかった。そのため、支援者側としては、CLD生の「水平的アイデンティティ」に対し、常に注意深くアンテナを張り、CLD生が持つ「水平的アイデンティティ」に対し、「エポケー（判断保留）」的な態度を示しつつ、相手を理解しようとする心構えを持った上で、支援活動に臨む必要がある。さらに、「垂直的アイデンティ

ティ」と「水平的アイデンティティ」が当事者であるマイノリティの現実世界に並立して存在することにより、その当事者が複数のマイノリティ性に起因する二重・多重の差別と排除に遭う可能性も確認できた。上野（1996）は、差別が互いに絡み合い、複雑に入り組んだ状況を「複合差別」という言葉で概念化した。これは、社会的弱者が複数の差別を同時に経験している状態を指し示すものだと言えよう。支援者側がこうしたCLD生の複数のマイノリティ性の特徴を把握し、「複合差別」を防ぐセーフティーネットとして機能することができれば、危機的な状況を回避することにつながるだろう。また、複数のマイノリティ性をもつCLD生が自己認識を深め、自らの将来や実現可能なライフスタイルについて考える活動、在籍する学校全体、所属するクラス全体が様々なマイノリティ性をもつ生徒に対する理解を深め、共感を呼び起こす活動を日頃の支援に組み込むことが求められる。

第2部第6章では、支援現場に現れたCLD生の複合的な課題について考察した。CLD生が現実の生活圏の範囲内におけるコミュニティとインターネット上のバーチャル・コミュニティに潜む危険性に曝されている現状、そして、そのコミュニティの閉鎖性と排他性から生じた弊害について描き出した。また、よく似た生育環境のもとで成長し、孤独と家庭によるネグレクトを経験してきたCLD生同士の恋愛感情が、依存し合う関係に発展した場合、そこには、暴力や自傷行為が容易に発生し得る環境であることが明らかになった。さらに、親密な関係の中で発生した性暴力に対する認識の不足から生じたリスクがCLD生の成長に陰を落とす要因となっていたことも確認できた。特に、性暴力の加害者と被害者の間に、それぞれが性暴力の当事者であるという自覚がなされていなかった場合、CLD生のその後の恋愛関係において、リスクを回避する意識が十分働いていなかった。加えて、避妊と性感染症に関する知識を持っていたにも関わらず、それらの知識が実生活の中の「性」に関する行動に活かしきれていなかった現状を鑑みれば、CLD生を含めた全生徒に対する現在の性教育の不十分さに留意した上で、支援の在り方を考える必要があると考えられる。

第3部第7章では、CLD生の人間形成につながる意欲・能力、支援側に求められる意欲・能力の間に共通点を見つけ出すことにより、【自己認識を促す】、【ラポールを構築する】、【助けを求める】、【自身に肯定的な価値を見出す】、【他者に対するシンパシー】という5項目にまとめた。教育システムおよび学校体制に対する提言として、特に、日本人の生徒たちと異なる言語および環境で育てられたCLD生の複数のマイノリティ性に配慮し、長期的な視点で支援を考えることを挙げたい。また、本論文で明らかになったCLD生の様々な経験および学習面・心理面における課題は、実は日本人生徒における課題とも共通していた。今後も教育システムおよび学校教育全体が生徒の人間形成上の需要に応えるための改革が求められているのではないだろうか。

※この論文内容の要旨は学位授与後３か月以内にインターネットで公表されます。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　潘　寧　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	山 下　仁
	副 査	教授	西 口　光 一
	副 査	准教授	難 波　康 治

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の学校に通う多文化・多言語の背景をもつ生徒たちの人間形成を支える支援のあり方について、アクションリサーチとライフストーリーという方法論を用いて考察し、これまで明らかにされなかった彼らの複合的アイデンティティという課題の諸側面を明らかにしたものである。本論文は三部構成となっている。第１部（第1章から第3章）では研究の背景、理論的枠組みおよび方法論の紹介がなされ、第2部（第4章から第6章）ではそれぞれの調査結果が提示され、第3部（第7章）では結論と今後の課題が記述されている。以下、本論文の内容に沿って審査結果を記す。

本論文のテーマは、筆者の経験に基づく問題意識に裏打ちされた極めて独創的なものである。留学生でありながら日本語のレベルも高く、明快な議論の構成とも相俟ってとても読みやすい論文となっている。まず、この点が高く評価できる。第1章では、多文化・多言語の背景をもつ生徒たち（Culturally Linguistically Diverse Children, 以下「CLD生」）の人間形成に関する研究の背景が明らかにされ、外国人に対する教育が保証されていないなどの日本における制度上の不備が指摘されている。本論文はミクロ社会言語学的研究であるが、教育政策などのマクロ社会言語学的問題にも考察が及んでおり、俯瞰的な観点から問題の所在がとらえられている。この点も本論文の特徴の一つといえる。第2章では、諸分野の先行研究を基に、母語を活用した支援の可能性が理論的に議論され、将来に向けた発展の可能性が検討されている。主としてCumminsの論文が取り上げられているが、この分野における代表的な研究者の理論の展開が丁寧に論じられており、理論的にもしっかりとした考察がなされていることが見て取れる。第3章では、アクションリサーチとライフストーリーという本論文で用いられた研究手法が紹介され、本研究のフィールドおよび調査協力者の概要が説明されている。第4章は、アクションリサーチを用いたCLD生の母語を活用した学習面・心理面の支援について検討した調査結果が記されている。第5章では、CLD生のライフストーリーを通して、CLD生のアイデンティティの確立過程が明らかにされている。この章が本論文の中心となっており、そこでは言語やエスニックルーツなど家族から受け継がれた「垂直的アイデンティティ」と仲間との人間関係によって培われる「水平的アイデンティティ」が区別され、特にこれまで考察されなかった後者の「水平的アイデンティティ」の問題が取り上げられている。たとえば、「性的マイノリティ」や「不良」の問題といった、家族とは必ずしも共有できない「水平的アイデンティティ」が、CLD生の人間形成にとって重要であることが確認されている。また、CLD生のライフストーリーを通して、「水平的アイデンティティ」の存在が、CLD生の所属する家族やコミュニティ、学校などにより、排除、または、無視されている可能性が示唆され、支援者側としては、そのような「水平的アイデンティティ」に配慮してCLD生を理解しようとする姿勢が必要であると論じられている。第6章では、第4章と第5章では議論されなかった、CLD生の持つ問題が記され、若者の成育にとって関与性のある難しい課題が議論されている。具体的には、よく似た環境のもとで成長し、孤独と家庭によるネグレクトを経験してきたCLD生同士の親密な関係が、相互に依存し合う関係に発展したとき、その関係が暴力や自傷行為に発展しうることが明らかにされている。さらに、親密な恋愛

関係において、性暴力に対する認識不足によって生じたリスクがCLD生の成長に陰を落としていたことも確認されている。避妊と性感染症に関する知識を持っていたにもかかわらず、それらの知識が実生活の中の「性」に関する行動に活かしきれていなかった事実が示され、この「性」に関する問題がCLD生に限らず、全生徒にも該当することが示唆されている。

第7章では、全体の調査結果がまとめられ、CLD生の人間形成につながる支援の在り方が考察されている。ここでは支援する側に求められるものとして、自己認識を促すこと、ラポールを構築すること、助けを求めること、自身に肯定的な価値を見出すこと、そして他者に対するシンパシーをもつことという5つの項目が示されている。さらに筆者は、教育システムおよび学校体制に対する提言として、日本人の生徒たちと異なる言語および環境で育てられたCLD生の複数のマイノリティ性に配慮し、長期的な視点で支援を考えることを主張している。

本論文は、冒頭でも記したように、文章が明快であり、議論の立て方も理路整然としている。また、一般的にCLD生というと、民族的アイデンティティという「垂直的アイデンティティ」の問題に終始する議論が多い中で、本論では、「性的マイノリティ」や「不良」という「水平的アイデンティ」の問題にも踏み込んでおり、CLD生の複合的なアイデンティティの問題を考慮する必要性が示唆されている。この点は高く評価できる。さらに、ここで明らかになったCLD生の経験や学習面・心理面における課題は、CLD生だけではなく、日本人生徒の課題でもあることが示唆されており、筆者のこの問題に対する静かな熱意が感じられる。マイノリティの抱える問題が実のところマジョリティの問題に通底するという洞察は本論文のテーマの独創性と同様、筆者の研究者としての資質を如実に物語るものである。

たしかに本論文にもいくつかの誤植や、記述のなかに性急と思われる部分もあるが、それらは本論文の価値を損なうものではない。筆者の中国語母語話者としてのアイデンティティと、ユニークな視点、忍耐強い支援者としての能力、そして論理的で明快な文章力と実証的な議論の展開は、今後の研究者としての活躍を期待させるものである。

以上より、潘寧氏の論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。